

唐代厩牧令の復原からみる唐代の交通体系

河野 保博

はじめに

前近代の中央集権国家には「駅伝制」と呼ばれる交通制度が必要不可欠であった。古代中国だけでなく、アケメネス朝ペルシア、古代ローマ帝国、インカ帝国などの中央集権国家に同様の交通システムが整備されていることから、その重要性が理解できる。いずれの国家も王京と支配領域の末端までを結ぶ交通網を整備し、文書の伝達と官員の往来を通じて中央の命令を隅々まで伝え、また各地の情報を中央に集めて、その統治を完遂させようとした。日本の古代王権も中央集権国家の形成を目指し、律令制を受容するなかで駅伝制と呼ばれる交通制度を導入した。日本では古くから交通に関する研究が進められてきたが、源流とも言うべき唐代の交通に関しては史料の残存状況などの問題から不明な点が多かった。さらに唐代の交通と言っても、いかなる地域・いかなる時点の交通規定なのかという問題もある。唐朝の支配領域は広く、その期間も長い。中国全土に広がる交通制度なのか、西域に限定される交通方式なのか。それ以外にも前代の交通制度との関係、または唐代であっても初期と

中後期では大きな違いがあり、駅制の弛緩、宋代に続く「通鋪」の登場と常に変化しているため、唐代の交通体系も判然としていない。唐代の交通制度が国家の基本法である律令中にどのように規定されているのか、まずは唐令に規定された交通体系を明らかにすることが肝要である。そして、唐代の交通体系が明らかにならない限り、日本の交通体系との比較は不完全なものとならざるをえない。

近年、北宋「天聖令」が発見されたことにより、律令研究が進展し、唐代の駅伝制についても様々な研究視角が提示され、日中の交通制度に関する比較研究も進められている状況である。そこで本稿では、交通に関わる規定が集中する厩牧令を取り上げ、唐令の復原を通じて法規定にみえる駅制と伝送制がどのようなものであるのかを分析し、唐代の交通体系を考えていきたい。

一 唐代交通の研究

まず、唐代の駅制と伝送制について、これまでどのような研究がなされてきたのだろうか。概略を記したい。

唐代交通研究の嚆矢として挙げられるのが、坂本太郎氏の研究であろう。坂本氏は日本古代の駅制研究のなかで、唐代の制度にも触れている⁽¹⁾。また、中国では陳沅遠氏が唐代の駅の組織や管理、駅使などについて史料を蒐集して詳細に論じた⁽²⁾。ついで、青山定雄氏が坂本・陳沅氏の研究を継承し、駅制と伝制の相違、駅制の変遷と宋代への変化を論じた⁽³⁾。三氏による理解をまとめると、唐代の駅伝制は秦漢代以来の駅制と伝制を引き継ぐものであるが、唐代では伝制は駅制のなかに組み込まれた。駅馬と伝馬は共に駅に設置され、駅馬は緊急を要する交通手段であり、伝馬は常行の交通手段として利用されていた。また、駅馬は乗騎に用いられ、伝馬は主に乗車に用

いられた、となるだろう。こういった見解は日本における唐代交通の理解のなかでも定着していった。⁽⁴⁾

このように従来の唐代駅伝制の理解では伝制は駅制に従属するという考えが通説であったが、王冀青氏は敦煌・吐魯番文書の検討から伝馬について再検討をおこなった。⁽⁵⁾ それによると、伝馬は駅に置かれる駅馬と異なり、馬坊によって管理される。馬坊は州県の治所に設置されるもので、伝馬は常行の人員輸送と共に物資輸送にも充てられるものと論じた。この王氏の視角を引き継ぎ、さらに考察を深めた荒川正晴氏は、駅制は駅を拠点に通送される交通網であり、伝制は県治を拠点に通送される交通網であると述べた。⁽⁶⁾ ついで荒川氏は敦煌出土の伝馬坊牒の分析と県官の職責から、伝制は県を拠点として通送される交通体系であり、県に設置されている官馬を厩牒に應じて通給し、駅制ではカバーできない公用交通を支えるためのシステムであると位置つけた。⁽⁷⁾ それに対して、黄正建氏はこれらの交通は唐代前期の西北地域に限定されるものであり、伝制と呼ばれるような交通体系は律令には規定されておらず、伝送馬や伝送驢などは官馬・驢と同様の存在であり、州府で管理されるものであると指摘した。⁽⁸⁾

現存する唐代律令に伝制の規定がないことから、伝馬は官馬などと同様に州府で管理され、必要に応じて使用されるものとする考えも出されていたが、北宋天聖令の発見により伝制（伝送制）と考えられる交通制度が唐代にさかのぼると考えられる令文に規定されていることが判明した。宋家钰氏は駅制と伝制は共に州県の管理下にあり、その運営は徭役制によるもので、伝送制度（特に伝送馬）は駅制を補完するものであり、多くの場合は州県内部での輸送にあたっていたと論じた。⁽⁹⁾

新たな令文が見つかったことにより、駅制と伝送制それぞれの規定だけでなく、相互の関係も再検討する必要がある。そこで以下では、令文に見える駅制と伝送制の規定をそれぞれ分析し、それをふまえた上で唐代の交通

体系を検討したい。

二 北宋天聖令による唐代厩牧令の復原

(1) 北宋天聖令の発見と厩牧令の概要

一九九九年に中国浙江省寧波市の天一閣博物館で北宋天聖令の明代鈔本の発見され、二〇〇六年に『天一閣藏明鈔本天聖令校証 附唐令復原研究』(以下、『天聖令校証』と略記)が公刊されたこと⁽¹⁰⁾で、律令研究は新たな段階を迎えた。天聖令は天聖七年(一〇二九)に編纂された令であり、それは「旧文に因り、新制を以て参定」とあるように、唐令をもとに修定したものであった。また、修定に使用されなかった唐令(不行唐令)も付載しており、これによつて唐令の復原が大きく進んだ。

交通に関する規定が集中する厩牧令は五〇条が収載されており、その内訳は現行宋令が一五条、不行唐令が三五条である(後掲【表1】参照)。内容は閑厩や監牧の規定が二七条、交通制度と官馬の規定が一六条、官私諸畜の管理規定が七条であり、さらに不行唐令と宋令から推測される唐令三条を復原しており、計五三条の唐令が提起されている。この条文数は、これまで検討されてきた『唐令拾遺』および『唐令拾遺補』での復原条文二三条⁽¹²⁾や、日本令である「養老令」の厩牧令二八条を大きく越えるものである。

以下では、交通に関わる条文を中心に検討していきたい。

(2) 馬の生産と配備

まず、古代交通の要となる馬の生産について触れておきたい。動力革命以前、馬は高速移動の手段として、そして軍事力として忽せにできないものであった。唐代においても例外ではなく馬政は兵政と一体のものであった。⁽¹³⁾ そのため、その生産も重要視され、厩牧令の過半数は馬を生産し管理する厩と牧についての規定である。隴右地方を中心に唐全土に配備された官営牧場である「監牧」において生産された馬は、中央に上納されるものと地方に配分されるものに二分される。中央へ送られた馬は皇帝の乗騎や禁軍の騎兵、南衙諸衛などに充当された。地方に配分された馬は折衝府に配属されて官馬となり、そこからさらに伝送や駅の用途に就いた。

監牧で生産された馬は他の動物と共に帳簿により管理されていたが、個体の識別は焼印によつてなされていた。次に焼印のうち馬に捺す馬印について見ていきたい。⁽¹⁴⁾ 厩牧令の不行唐令十一条に詳細な規定があるので次に掲げる。⁽¹⁵⁾

史料1 『天聖令校証』厩牧令 不行唐令十一条

諸牧、馬駒以_二小官字印_一印_二右膊_一、以_二年辰印_一印_二右髀_一、以_二監名_一依_二左右廂印_一印_二尾側_一。〈若行容端正、擬_レ送_二尚乘_一者、則不_レ須_レ印_二監名_一。〉至_二二歳_一起_レ脊、量_二強弱_一、漸以_二飛字印_一印_二其右髀膊_一。細馬次馬俱以_二龍形印_一印_二其項左_一。〈送_二尚乘_一者、於_二尾側_一依_二左右閑_一印、印以_二三花_一。其餘雜馬送_二尚乘_一者、以_二風字印_一印_二左膊_一、以_二飛字印_一印_二右髀_一。〉(中略)経印之後、簡入_二別所_一者、各以_二新入処監名印_一印_二左頰_一。官馬賜_レ人者、以_二賜字印_一。配_二諸軍_一及充_二伝送駅_一者、以_二出字印_一、並印_二右頰_一。

右記の規定によれば監牧で生産された仔馬には、まず右膊（肩部）に小さな「官」字印を捺し、右髀（腿部）には馬齢を示す年辰印が捺され、尾の近くに監の名が捺された。ただし、形容端正で尚乗局に送る予定のものには監名を捺さなかった。二歳になると、その器量によつて各種の印が捺され、上納される予定の馬が選抜された。また、所属先が変わると新たに印が捺されることになっていった。さらに官馬を人に賜う場合は「賜」の印が捺され、諸軍・伝送・駅に配備される馬は右頬に「出」字印が捺された。

続く不行唐令十二条では、諸府に送られる馬の印について「諸府の官馬は本衛名印を以て右膊に印し、官字印を以て右髀に印せ。其れ本府名印は左の頬に印せ」とあり、折衝府に送られた官馬の右膊には本衛名が、右髀には「官」字が、左頬には本府名の印が捺されることになっていた。そして、駅および伝送に用いられる馬は不行唐令十三条に「諸そ駅馬は駅字印を以て左膊に印し、州名印を以て其の項左に印せ。伝送馬驢は州名印を以て右膊に印し、伝字印を以て左髀に印せ」とあつて、駅馬に充てられるものは左膊に「駅」字印が、項（首部）の左に「州名」印が捺され、伝送馬（と驢馬）は右髀に「州名」印が、左髀に「伝」字印が捺されることになっていた。このように監牧で生産された馬が折衝府に送られ、そこから駅馬や伝送馬として配備されるようになっていった。

以上述べたことを図示すると【図1】の通りである。

（3）官馬・伝送馬の飼養と管理

監牧において生産された馬のうち、地方へ分配されるものは「出」字印を捺され、各地の折衝府に送られる。折衝府に送られた馬は官馬となり、軍用馬として府内で飼養される。この官馬はすべて府内で飼養されるのではなく、折衝府の兵士のうち、富裕で飼養に堪えうる者を馬主として飼養させることが規定されている。¹⁶ この官馬

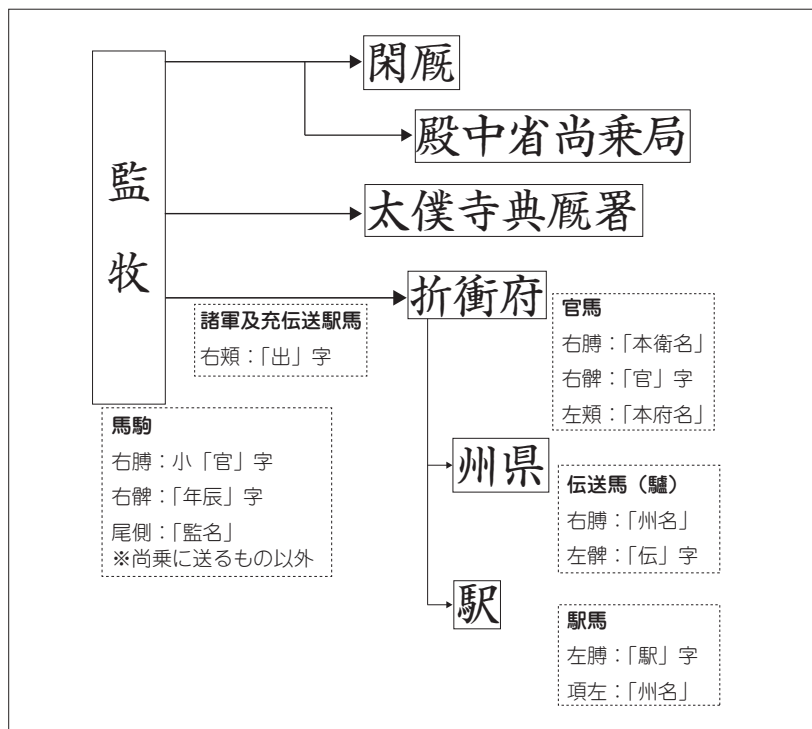


図1 監牧生産馬の分配模式図（交通関係中心）

のなかで良馬が騎馬となり、粗雑な馬は駄馬となった。⁽¹⁷⁾

折衝府で飼養される官馬から駅馬や伝送馬が選抜された。不行唐令二十一条には、

史料2『天聖令校証』廐牧令 不行唐令二十一条

諸州有_二要路之處_一、應_レ置_二駅及伝送馬驢_一、皆取_二官馬驢五歳以上十歳以下_一、筋骨強壯者充。如_レ無_二以_二当州応_レ入_レ京財物_一市充。不_レ充、申_二所司_一市給。其伝送馬驢主_レ於_二白_二丁_二雜色_一（_レ邑士駕士等色_一）_二丁内、取_二家富兼丁者_一、付_レ之_二令_レ養、以供_二通送_一。若無_レ付者而中男豊有者亦得兼取、傍_二折_二一丁課役_一資_レ之、以供_二養飼_一。

とあり、要路の州県に設置される駅馬および伝送馬・驢には、官馬のうち五歳から一〇歳までの筋骨強壯な馬が充てられ、適当な官馬がなければ、「入京財物」を用いて市で購入することになっていた。伝送馬・驢は白丁・雑色丁のうち、富裕で飼養に堪えうる者を馬主として飼養させるとあり、馬主は課役が免除される規定であった。⁽¹⁸⁾ 続く不行唐令二十二条では、

史料3 『天聖令校証』 厩牧令 不行唐令二十二条

諸府官馬及伝送馬驢、非^二別勅差行及供^二伝送^一、並不^レ得^二輒乘^一。本主欲^下於^二村坊側近十里内^一調習^上者聽。
其因^二公使^一死失者、官為^二立替^一。在^レ家死失及病患不^レ堪^二乘騎^一者、軍内馬三十日内備替、伝送馬六十日内備替、伝送驢随^レ闕立替。(後略)

とあり、官馬や伝送馬・驢に別勅がなければたやすく乗ることを禁じている。また、馬主が希望すれば居住する村坊の一〇里以内で調習することができた。さらに官馬と伝送馬・驢が公使の乗用に際して死亡した場合は官費で補充し、馬主の家で死闘、または病気などで乗騎に堪えられない場合には、馬主の責任で期限内に補充することが規定されている。関連して不行唐令二十三条には官馬・伝送馬が病老で乗用に堪えられない場合は市で買い替えることが規定されており、もし費用が不足した場合、官馬は府の予算から補填し、伝送馬は「当処官物」を充てるとある。また、同条には官馬と伝送馬は毎年、州刺史と折衝都尉・果毅都尉が検簡すると規定されており、官馬と伝送馬は一元的に管理されていることが想定できる。従軍の際の管理規定（不行唐令二十五条）や公使に対する供給規定（不行唐令二十六条）を見ても、州において伝送馬と官馬が一元的に管理されていることが窺われる。⁽¹⁹⁾

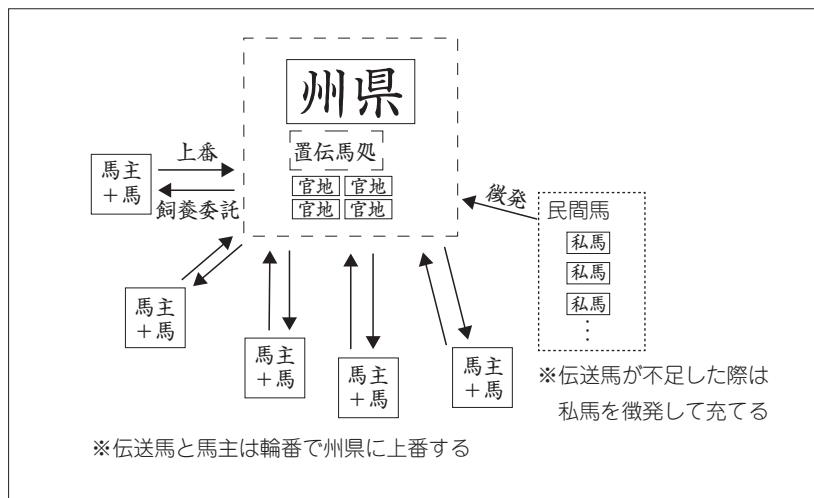


図2 伝送馬の飼養・管理模式図

伝送馬が州県のどの場所にどの程度の数量、配置されるのかについては規定が無いので不明であるが、不行唐令二十七条によれば、伝送馬の置かれる州県では伝送馬は分番して上番し「急速に應じる」とあり、上番する馬一匹につき、州県付近の官地四畝を給与することが定められている。これは永田英明氏が指摘するように、普段の通送業務は上番勤務の伝送馬が対応し、必要時には非番の伝送馬も動員するというフレキシブルな体制であったと思われる。²¹⁾ 後述するように駅使であっても緊急性が低い場合には駅馬ではなく伝送馬を用いることがあり、使者の官品に応じて馬が供給されるため、一定数の伝送馬を供給できるようにする必要があった。さらに、伝送馬の支給数を規定したと考えられる復原唐令四十一条の次になる復原唐令四十二条を見ると、(州県に)伝送馬がない場合には民間の馬を徴発すること²²⁾ 定しており、伝送馬の不足時には民間の馬を徴発することも規定されていた。

以上を簡単に図示すると【図2】のようになる。

次に伝送馬に対する供給規定を見てみたい。伝送馬を用

いて出使する場合、不行唐令二十六条には、

史料4『天聖令校証』厩牧令 不行唐令二十六条

諸官人乗_二伝送馬驢及官馬_一出使者、所_レ至之處、皆用_二正倉_一、準_レ品供給。無_二正倉_一者、以_二官物_一充。又無_二官物_一者、以_二公廨_一充。其在_レ路、即於_二道次駅_一供。無_レ駅之處、亦於_二道次州県_一供給。其於_レ駅供給者、年終州司總勘、以_二正租草_一填_レ之。

とあり、伝送馬・驢や官馬で出使する際の費用は正倉や官物といった州の財物を用いることが規定されている。さらに使者が道を移動する際は駅で供給を受けるとあり、駅がなければ州県で供給を受けることになっていた。また、駅での供給は一年ごとに集計して正租を以て充填するとある。伝送馬は州県の管理下にあるので、州の財源を用いて運営されることは当然であろう。しかし、駅には駅馬のみが置かれ伝送馬は置かれ_二ない_一。伝送馬も駅で供給を受けることには注意を要する。これは後述するように伝送馬と駅馬の管理規定は異なるが、どちらの供給施設でもある駅は州府の管轄であり、このことから_二一体的な運用が図られていたと_一考えられる。

(4) 駅馬の飼養と管理

次は駅馬の規定を見ていきたい。駅馬も伝送馬と同様に官馬のなかで「五歳以上十歳以下、筋骨強壯」なのが充てられた。駅制の供給・管理施設となる「駅」は不行唐令三十二条に「諸そ道に須らく駅を置くべきは、三十里ごとに一駅を置け」とあるように、基本的には三〇里（約一五キロメートル）ごとに一駅が置かれたが、

地勢阻険な場所などには状況に応じて設置され、辺縁地帯において鎮や戍による場合は里数の制限はなかった。そして、不行唐令三十三条には、駅には駅長が置かれ、駅の等級ごとに一定量の馬が配備されることが規定され、配備された駅馬が死闘した際は「当駅立替」すると規定されている。これだけでは、どのように補充するのか不明であるが、『唐律疏議』厩庫律監守借官奴畜産条の疏議には「駅馬驢一たび給する以後、死なば即ち駅長陪填せよ」とあり、駅長の責任で補充することが定められていた。この駅長がどのような身分であるかは厩牧令中には記されていない。賦役令の不行唐令十五条に伝送馬主と共に課役免除になっていることが見えている。⁽²³⁾

駅では駄馬三匹、駄驢五頭に一人の割合で駅丁が徴発され、分番して飼養にあたるのが、不行唐令三十四条に規定されている。例えば京師に置かれる都亭駅の場合、駅馬は七五匹配置されることになっており、それに対する駅丁は二五丁となる。

同条には駅丁が四番に分かれて上番すると記されている。これは伝送馬のように馬主が馬を預かり、飼養して上番するのではなく、駅丁が上番して駅内（もしくは駅近郊）の駅馬を飼養することになっていたと考えられる。中大輔氏が指摘するように、駅馬は緊急の情報通信のために設置されているのであり、常に一定数の駅馬が稼働できるようにしておかなければならなかったためである。⁽²⁴⁾

以上を簡単に図示すると【図3】のようになる。

最後に駅使の供給施設について触れたい。駅馬を用いて出使する際の供給施設は令文中には規定されていないが、『唐律疏議』職制律駅使稽程条の疏議には「駅を給ふは、銅龍伝符を給へ、伝符無き処、紙券とせよ。事の緩急を量り、駅数を符契の上に注せ。此の駅数に拠り以て行程とせよ」とあり、駅使は必ず伝符もしくは紙券に記された駅数を通過せねばならず、それを違えると処罰された。このように駅使は必ず駅に立ち寄ることが規定さ

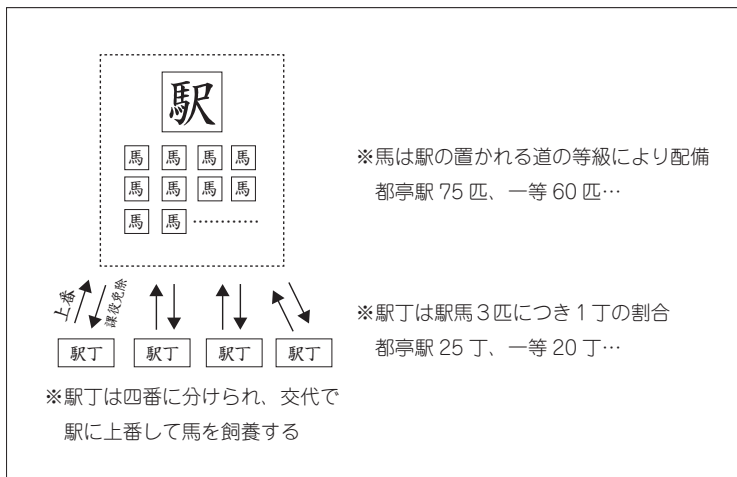


図3 駅馬の飼養・管理模式図

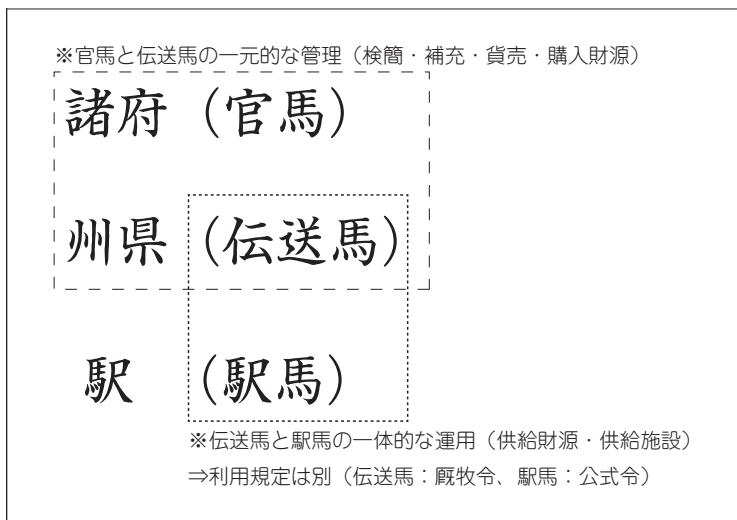


図4 官馬・伝送馬・駅馬の管理・運用模式図

れており、駅使の供給施設は駅であることが想定できる。さきに指摘したように伝送馬の移動における供給施設も駅であり、駅が置かれなかったところでは州県で供給されていた。駅馬・伝送馬の財源は州県の負担であり、その点で一体的な運用が可能であった。

以上を簡単に図示すると【図4】のようになる。

三 復原唐令にみる伝送制と駅制の相違

(1) 北宋厩牧令九条からの唐令復原にみる駅馬と伝送馬の相違

これまでは主に馬の配備、伝送馬と駅馬の飼養と管理の規定について検討してきた。次に出使者に対する馬の支給規定を検討してみたい。まず北宋の令文を掲げる。

史料5 『天聖令校証』厩牧令 宋令九条

諸_下応_下給_二通馬_一出使_上者、使相給_二馬十四_一、節度觀察等使翰林學士各給_二五疋_一、樞密直學士至知制誥防禦四方館閣門等使各四疋、員外郎以上三院御史及帶館閣省職京朝官武臣帶閣門祇候以上各_二二匹_一、太常博士以下並三班使臣各一匹。尚書侍郎卿監諸將軍及內臣奉史宣召、不限_二匹數多少_一、臨時聽_レ旨。其馬逐_レ鋪交替。無_二通馬_一處、即於_二所_レ過州縣_一、差_二私馬_一充、輒相給替。

この条文には通馬を利用して出使する際、官職に応じて通馬を支給することが規定されている。この通馬とは

通鋪に置かれた馬のことで、唐後半期に駅制が廢れるなかで登場し、主に文書伝達を担い、宋代に入ると駅と共に公用交通の基幹となったものである^②。宋代の通鋪には徒歩によるもの以外に馬を用いる馬鋪もあった。馬鋪は駅間よりも短い区間に設置されて馬を交換し、供給を受ける場所であつて同じく供給施設である駅は宿泊の場所としての意味合いを強くしていった。宋代の通馬が唐代の駅制もしくは伝送制どちらの系譜をひくものなのか、それとも別個のものであるのか一概には言えず、この条文からは唐令を復原する際に「通馬」が駅馬なのか、伝送馬なのか、それとも両方を指しているのか、特定することが難しい。

『天聖令校証』の厩牧令復原研究を担当した宋家鈺氏は、当該条文を『唐令拾遺』が唐令復原の根拠としていた史料6の『唐律疏議』と史料7の『資治通鑑』の注から史料8の条文を復原し、駅馬と伝送馬の支給規定であるとした。

史料6 『唐律疏議』雜律 応給伝送剩取条疏議

応_レ給_二伝送_一、依_二厩牧令_一、官爵一品給_二馬八疋_一、嗣王郡王及二品以上給_二馬六疋_一、三品以下、各有_二等差_一。

史料7 『資治通鑑』卷二百三 垂拱二年（六八六）三月 胡三省注

唐制、乗_レ伝日四駅、乗_レ駅日六駅、凡給_レ馬者、一品八匹、二品六匹、三品五匹、四品五品四匹、六品三匹、七品以下二匹。給_二伝乗_一者、一品十馬、二品九馬、三品八馬、四品五品四馬、六品七品二馬、八品九品一馬。三品已上勅召者、給_二四馬_一、五品三馬、六品已下有_レ差。

史料8 『天聖令校証』 厩牧令 復原四十一条

諸乗_レ伝日四駅、乗_レ駅日六駅、凡給_レ馬者、官爵一品八匹、嗣王郡王及二品六匹、三品五匹、四品五品四匹、六品三匹、七品以下二匹。給_二伝乗_一者、一品十馬、二品九馬、三品八馬、四品五品四馬、六品七品二馬、八品九品一馬。三品已上勅召者、給_二四馬_一、五品三馬、六品已下有_レ差。〈尚書侍郎卿監諸衛將軍及内臣奉_レ使宣召、不限_二匹数多少_一、臨時聽_レ旨。〉

なお、史料5の後半にある傍線部は、日本令（公使乗駅条）との比較から別条の出使無馬私馬充条として復原されている。この点については後述したい。

それに対して、市大樹氏は次のような復原案を提起した。²⁶⁾

史料9 市大樹氏による復原唐厩牧令四十一条

諸公使須_レ乗_二駅及伝送馬_一者、乗_レ伝日四駅、乗_レ駅日六駅、給_二伝送_一者、官爵一品八匹、嗣王郡王及二品六匹、三品五匹、四品五品四匹、六品三匹、七品以下二匹。三品已上勅召者、給_二四匹_一、五品三匹、六品已下有_レ差。〈尚書侍郎卿監諸衛將軍及内臣奉_レ使宣召、不限_二匹数多少_一、臨時聽_レ旨。〉若_レ不足者、即以_二私馬_一充。其私馬因_レ公致_レ死者、官為_二酬替_一。

市氏は当該条文を伝送馬の支給規定とし、駅馬の支給は公式令に規定されたとする。そして、直線部分のように公使が駅馬と伝送馬に乗る際の行程の目安として「乗_レ伝日四駅、乗_レ駅日六駅」の部分を復原し、破線で示

した後半部分も宋氏とは異なり、同一条文として復原している。

しかし、『唐令拾遺』が想定するように伝送馬の支給は厩牧令に規定され、駅馬の支給は公式令に規定されていたとすると、同一条文内に伝送馬と駅馬の記述があるのは不自然であり、「諸公使須_レ乘_三駅及伝送馬_一者、乘_レ伝日四駅、乘_レ駅日六駅」の部分は復原し得ないだろう。

宋氏は史料7の冒頭にある「唐制」の「給伝乘」部分を式文と想定し、「給馬」部分を伝送馬として、史料6の厩牧令の引文と組み合わせる改めて唐令を復原、「尚書侍郎」以下も令文から外して、次のような伝送馬の給付数規定とした。⁽²⁷⁾

史料10 宋家鉦氏による復原唐厩牧令四十一条

諸給_三伝送馬_一者、官爵一品、給_三馬八匹_一、嗣王郡王及_三二品以上、給_三馬六匹_一、三品、給_三馬五匹_一、四品五品、給_三馬四匹_一、六品、給_三馬三匹_一、七品以下、給_三馬二匹_一。

後述するように駅馬の支給規定が公式令にあることを考えると、宋氏の復原案は首肯できる。ただし、もう一つ問題になるのが、宋令九条の後半部分である。宋氏は『令集解』厩牧令公使乘駅条の「凡公使須乘_三駅及伝馬_一。若不_レ足者。即以_三私馬_一充。其私馬因_三公使_一致_レ死者。官為_三酬替_一」という文言によって、ほぼ同文の出使無馬私馬充条を復原している。しかし、宋令九条からの復原が伝送馬に関する規定であり、駅馬に関する文言を削っていることを考えると、この「凡公使須乘_三駅及伝馬_一」という文言はそのまま復原することはできないのではないだろうか。侯振兵氏は市氏の指摘をふまえて、宋令九条を一条として復原し、後半部分を伝送馬不足の際の

補足規定としている。⁽²⁸⁾ 筆者も侯氏のように当該箇所を伝送馬不足の際の補足規定だと考える。⁽²⁹⁾

つぎに唐令復原四十一条から除かれた「乗_レ伝日四駅、乗_レ駅日六駅」の文言は唐令として復原できるのであろうか。それを論じる前に駅馬の支給規定を見てみたい。

史料11『唐律疏議』職制律 増乗駅馬条疏議

依_二公式令_一、給_レ駅、職事三品以上、若王四疋。四品及国公以上三疋。五品及爵三品以上二疋。散官前官各通_二減職事官一疋_一。餘官爵及無品人各一疋。皆數外別給_二駅子_一。此外須_レ將_二典吏_一者、臨時量給。

『唐令拾遺』は史料11などから、駅馬の給付規定は公式令に存在していたことを想定している。史料6では伝送馬に関してのみ規定しており、史料11では駅馬に関してのみ規定していることを斟酌すれば、唐令では駅馬と伝送馬の支給規定は別の編目にあつたと考えられる。

「乗_レ伝日四駅、乗_レ駅日六駅」の文言は『新唐書』にも同様の文言が見えており、⁽³⁰⁾『資治通鑑』に載せられた「唐制」には何らかの根拠を想定しうる。前掲した『唐律疏議』職制律諸駅使稽程条の疏議には、駅馬を給付する際に用いられる符契には駅数を注すことが規定されており、一日の行程の目安を示すことが必要であつたと思われる。『唐会要』には「長安四年（七〇四）五月二日。伝に乗るの人、使事閑緩ならば、日ごとに四駅を過ぎることを得ざれ⁽³¹⁾」とあり、伝による移動の場合は四駅を過ぎてはならないとの勅が出されている。

史料12『令義解』公式令 給駅伝馬条

凡給^二駅伝馬^一。皆依^二鈴伝符剋数^一。〈事速者。一日十駅以上。事緩者八駅。還日事緩者。六駅以下。〉

日本令では駅使の一日の進むべき駅数が公式令に規定されており、唐公式令にも目安となる駅数が規定されていたと考えられる。⁽³²⁾ 日本令では駅馬と伝馬の支給規定が同じ公式令にあり、唐令とは異なり駅制と伝制が一体的に取り扱われていることが多い。そのことは別に論じるとして、唐の法規定上では駅制と伝送制とが明確に区別されている。

ただし、馬の支給規定などは区別されているが、不行唐令二十六条にあるように、駅使も伝送使も駅を基本の供給施設としており、前述したように運用における一体性もみてとることができる。

(2) 北宋厩牧令十二条からの唐令復原

北宋時代の通馬利用について規定した宋令九条は、唐令では伝送馬を支給する規定であることが復原できたが、それ以外の交通に関わる宋令はどうであろうか。宋令十五条は駅に藁を支給する規定であるが、関連史料が少なく、日本令にも対応条文がないため復原が難しい。⁽³³⁾ 宋令十一条は『唐令拾遺』が復原の根拠とする『唐六典』の水駅規定と字句が近似しており、養老令にも対応する水駅条⁽³⁴⁾の条文があることから、唐代の水駅設置規定として復原されている。⁽³⁶⁾ 問題となるのは宋令十二条である。以下に本文を掲げる。

史料13 『天聖令校証』 厩牧令 宋令十二条

諸乗_レ通、給_二借_二差私馬_一 応_下至_二前所_一 替換_上者、並不_レ得_二騰過_一。其無_レ馬之處、不_レ用_二此令_一。

宋氏は史料14の日本令がこの条文に対応するとして、史料15のような唐令を復原している。⁽³⁷⁾

史料14 『令義解』 厩牧令 乗駅条

凡乗_二駅及伝馬_一。 応_下至_二前所_一 替換_上者、並不_レ得_二騰過_一。其無_レ馬之處、不_レ用_二此令_一。

史料15 『天聖令校証』 厩牧令 復原三十七条

諸乗_二駅及伝送馬驢_一、 応_下至_二前所_一 替換_上者、並不_レ得_二騰過_一。其無_二馬驢_一之處、不_レ用_二此令_一。

この条文では駅馬および伝送馬・驢に乗る際、馬や驢馬を交換すべき地点に到着したら必ず馬・驢馬を交換することを規定し、もし馬・驢馬が出払って駅にいない場合は交換しなくても良いとする。この条文もオリジナルは「通馬」であり、それを「駅及伝送馬驢」と復原するのには従えない。宋令九条の復原でも指摘したように、宋代の通馬をそのまま唐代の伝送馬もしくは駅馬とすることは避けなければならない。また、厩牧令のなかで駅馬と伝送馬が共に規定されることは少なく、日本令とは編成原理が異なることを前提にしなければならない。一つ前の条文である宋令十一條が水駅の規定であり、後に論ずる条文排列から考えると、当該条文は駅馬について規定した条文であると考えられる。直接的に示す史料はないが、次に掲げる『唐律疏議』の記述がその証左となろう。

史料16 『唐律疏議』 職制律 乘馱枉道条

諸乘_二馱馬_一輒枉_レ道者、一里杖一百、五里加_二一_等、罪止徒二年。越至_二他所_一者、各加_二一_等。謂_レ越_二過所_レ詣之處_一。經_レ馱不_レ換_レ馬者、杖八十。無_レ馬者、不_レ坐。

疏議曰、乘_二馱馬_一者、皆依_二馱路_一而向_二前馱_一。若不_レ依_二馱路_一別行、是為_レ枉道。越至_二他所_一者、注云、謂_レ越_二過所_レ詣之處_一、仮如從_二京使向_二洛州_一、無_レ故輒過_二洛州_一以東、即計_レ里加_二枉道_一等_一。經_レ馱不_レ換_レ馬、至_二所_レ經之馱_一、若不_レ換_レ馬者、杖八十。因而致_レ死、依_二廐牧令_一、乘_二官畜產_一、非理致_レ死者備償。無_レ馬者不_レ坐、謂_二在_レ馱無_レ馬、越過者無_レ罪、因而致_レ死者不_レ償。

問曰、仮有_二下使人乘_二馱馬_一枉_レ道五里、經過反覆_上、往來便經_二二十里_一、如_レ此犯者、從_二何科斷_一。

答曰、律云_レ枉_レ道、本慮_二馬勞_一、又恐_二行遲於_レ事稽廢_一。既有_二往來之理_一、亦計_二二十里_一科論。

史料16では馱使が正しい経路で進まなかった場合の罪が規定されており、あわせて経過する馱で馬を交換しなかった時の罪も規定されている。そして傍線を付した律本文の最後に「馬無きは、坐さず」とあるように、馱に交換すべき馬がなかった場合には罪に問われないことが記されている。この律の目的は最後の問答部分に記されているように「馬勞」を考えてのことであり、緊急大事の情報伝達に支障が無いように馬を交換することが求められているのだろう。

以上のことから、宋令十二条は馱制に関する規定だと想定することができ、唐令を復原するならば「諸乘_二馱馬_一、応_二至_二前所_一替換_上者、並不_レ得_二騰過_一。其無馬之處、不_レ用_二此令_一」となるだろう。

(3) 厩牧令の復原からみた唐代の交通体系

ここまで検討してきた唐代の厩牧令復原から唐代の伝送制と駅制の特質をまとめると以下ようになる。

伝送制は要路の州県に配備された伝送馬を基幹とする交通であり、伝送馬主に馬を飼養させ、彼らを上番させることで州県の通送業務に対応し、伝送馬に不足がある時には私馬を徴発することもあった。伝送馬は折衝府の官馬と一元的な管理がされる一方、移動中の供給は駅でなされ駅馬との一体的な運用もおこなわれていた。

駅制は要路に設置された駅に配備された駅馬を用いる交通であり、駅には駅長の管理のもと規定数の駅馬が置かれ、駅丁を上番させて駅馬を飼養させることで緊急の情報伝達に対応させていた。

伝送馬も駅馬も折衝府の官馬から配備されるが、駅馬は伝送馬のように官馬との一元的な管理はおこなわれず、相対的に独立して管理された。駅制は国都と州府、または軍府を結ぶ緊急情報・軍事情報の伝達網であり、『唐律疏議』に駅使に関する罰則規定が数多くあるようにその使用は厳しく制限されていた。駅馬の利用には銅龍伝符もしくは紙券が必要であったが、これは皇帝権力の象徴（ミシルシ）であり、駅馬の支給規定は公式令に規定されていた。公式令は公文書の様式や作成の諸規定、官人の秩序、印璽の管理運用などを定めた編目であり、そのため緊急時の文書の伝達を担当する駅制もこのなかに規定されているのだろう。駅馬の利用に銅龍伝符という皇帝権力の象徴が使われることに關して、荒川氏は皇帝と各州県との間の政治的な從属關係を可視的に示すものであると述べ、州県は駅馬・駅を維持管理し駅使に供給することが義務であったと指摘している⁽³⁸⁾。

それに対して伝送制は州府内を中心とした日常の交通を担っており、通牒という州で通常使用される文書によつて運用されていた⁽³⁹⁾。これについて、荒川氏は中国社会の基層的行政単位である「県」を基盤とした交通機能であり、漢代から形を変えて存在する地域社会の交通機能「伝」を制度的に取り込んだもので、伝送制とは伝送・

通送の際には通牒により必要に応じて徴発される交通機能であると述べている。⁽⁴⁰⁾

伝送馬がどのような時に用いられるかについて示す明確な規定は無い。ただし、不行唐令三十五条の「伝送馬差給条」に伝送馬の利用規定を定めている。この条文では諸州で令・式の規定以外に伝送馬の利用を禁止すること、蕃客や献物を伝送する際に伝送馬を支給すること、桂州・広州・交州の三府派遣使への伝馬を支給することなどが規定されている。内容をみるとこれは一般的な伝送馬の利用規定ではなく例外規定を一条にまとめたものであり、日本令にも対応条文がなく、排列も不行唐令の最後に置かれていることから、当初の法規定にはなかった可能性がある。⁽⁴¹⁾

駅馬の支給規定は公式令に、伝送馬の支給規定は厩牧令にあり、両者の運用は別個になされていたが、次の史料17のように駅使であつても緊急性が低い場合は伝送馬が用いられた。

史料17『唐六典』卷八 門下省 給侍中

凡_レ発_レ駅遣_レ使、則_二審_一其事宜_一、与_二黄門侍郎_一給_レ之。其緩者給_レ伝、即不_レ応_レ給、罷_レ之。

公使の移動が駅ではなく伝送によりなされる場合には、復原四十一条に規定されるように駅馬と同様官爵に応じて伝送馬が支給された。そして、その移動中の供給は駅使と同じように駅においておこなわれた。そのため、要路の州県では伝送使に対応するために伝送馬・驢を設置し、その伝送・供給に備えた。不足した場合や常置されない州県では、私馬を徴発しその任にあたつたと考えられる。⁽⁴²⁾荒川氏が「県が何等かの交通手段を何等かの⁽⁴³⁾たちで確保していた」と述べるように交通量の多い重要な地域には伝送馬が設置され公使の伝送に備えたのだろ

う。また、駅も州県の財源で維持管理され、駅使・伝送使ともに駅を供給施設とするため、駅馬と伝送馬は一体的に運用されていたと考えられる。

四 復原唐令の条文排列案

最後に復原唐令の条文排列を試みたい。『天聖令校証』では、養老令（および『唐令拾遺』）の排列をもとに復原している⁽⁴⁾。他の編目では養老令と天聖令中の宋令・不行唐令の条文排列に大きな差は無いが、厩牧令は大幅に変更されている。養老令では厩と牧に関する条文群、駅伝制に関する条文群、園畜の処理などに関する条文群の順に排列されているが、天聖令では駅伝制に関する条文が二箇所に分かれている（後掲【表1】参照）。宋氏は養老令に準拠して駅伝制に関する部分を一群にしている。しかし、本稿で検討したように日唐の駅伝制、特に唐の伝送制と日本の伝馬制には隔たりが大きい。日本では駅馬と伝馬を一体的なものとしており、この日唐の駅伝制の相違が条文排列にも反映されていると考えられる⁽⁵⁾。

日本令での改変を反映させないように唐令を復原するには、復原唐令の内容によって排列し直す必要がある。宋令の条文群と不行唐令の条文群の排列順序は、唐令の排列順序を踏襲していると考えられるので、不行唐令の排列をできるだけ変更せず、宋代に入って変更された宋令を内容によって適宜挿入していく必要がある。厩牧令の条文構成はその内容から、官畜への支給規定、官畜の生産規定、焼印の規定、厩・牧の規定、官馬・伝送馬の管理規定、官・私諸畜の管理規定、駅制の規定と分類することができる。これによって条文を排列し直したのが【表2】である。No.1～29が諸官畜の生産と管理に関する条文群であり、No.30～40が官馬と伝送馬に関する条文群、

No. 40～47が官私の諸畜の管理に関する条文群、No. 48～53が駅制に関する条文群となる。⁽⁴⁶⁾

おわりに

天聖令の宋令・不行唐令から唐令を復原することで、これまで不明な点が多く、日本令や西域文書に依拠してきた唐代の交通体系を再検討することが可能となった。唐代の交通体系のなかで具体的な規定がみられず位置づけが不明瞭であった伝送馬について、法規定から要路の州県に設置されて伝送を担う存在であることが明確になった。伝送制と駅制とは編成原理が異なり、馬の支給も別の編目に規定されているが、運営においては一体的な部分もあることを確認した。

そして、唐代の交通体系を復原することで、あらためて古代日本の律令制下の交通体系との比較が可能となる。古代日本の交通体系は唐代と比べて、伝馬を駅馬と一体的な制度として位置づけようとする傾向が強く、交通制度を導入する際に駅制と伝馬制を同じ条文に規定しようとしており、それが条文排列の違いにも出てくると考えられる。唐令復原の際には日本令を参照しなければならないが、同時に日本における改変を常に念頭に置いて用いなければならないだろう。

本稿では唐令を復原し、その法規定から駅制と伝送制について検討した。そのため、実際の運用状況や日本令との比較などはおこなえなかった。唐代の交通制度の実態や変遷、または日本の駅伝制との比較など、検討すべき課題は多い。それらを今後の課題として、ひとまず筆を擱く。

註

- (1) 坂本太郎『上代駅制の研究』至文堂、一九二八年、のち『坂本太郎著作集 八 古代の道と駅』吉川弘文館、一九八九年に収録。
- (2) 陳沅遠『唐代駅制考』『史学年報』一一五、一九三三年。
- (3) 青山定雄『唐代の駅と郵便進奏院』『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館、一九六三年。
- (4) たとえば、『中国では通信のための駅は駅馬により、旅行者のための伝は伝車によつて使い分けられたが、道路と駅亭は共通して用いられていた』(木下良『駅伝制について』『事典日本古代の道と駅』吉川弘文館、二〇〇九年)とある。
- (5) 王冀青『唐前期西北地区用于交通的駅馬、伝馬和長行馬—敦煌、吐魯番発現的館駅文書考察之一—』『敦煌学輯刊』一九八六一、一九八六年。
- (6) 荒川正晴『唐代駅伝制度の構造とその運用(Ⅰ-Ⅴ)』『吐魯番出土文物研究会会報』七九・八三、一九九二年。
- (7) 荒川正晴『唐朝の交通システム』『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇、二〇〇〇年。
- (8) 黄正建『唐代的“傳”与“通”』『中国史研究』一九九四・四、一九九四年。
- (9) 宋家钰『唐開元厩牧令的復原研究』天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校証『天一閣藏明鈔本天聖令校証 附唐令復原研究』中華書局、二〇〇六年。
- (10) 戴建国『天一閣藏明抄本「官品令」考』『歷史研究』一九九一・三、のち『宋代法制初探』黑竜江人民出版社、二〇〇〇年に収録。
- (11) 天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校証『天一閣藏明鈔本天聖令校証 附唐令復原研究』中華書局、二〇〇六年。
- (12) 仁井田陞『唐令拾遺』東方文化学院東京研究所、一九三三年、のち東京大学出版会より一九六四年に覆刻、仁井田陞著・池田温編集代表『唐令拾遺補』東京大学出版会、一九九七年。
- (13) 唐代の監牧、馬政については、横山貞裕『唐代の馬政』『国士舘大学人文学会紀要』三、一九七一年、山下将司『唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬』『東洋史研究』六六・四、二〇〇七年、林美希『唐前半期の厩馬と馬印—馬の中央上納システム—』『東方学』一二七、二〇一四年を参照。
- (14) 唐代の馬印については林美希前掲註(13)論文が詳細に検討している。
- (15) 本稿で使用する天聖令の条文は前掲註(11)『天一閣藏明鈔本天聖令校証 附唐令復原研究』収載の『唐開

元厩牧令復原清本」および宋家鉦前掲註(9) 論文に拠ったが、本条は『唐会要』卷七十二、諸監馬印を参照して、読点の位置を変更した。

- (16) 『天聖令校証』厩牧令不行唐令二十条「諸府内、皆量付_二官馬_一令_レ養。其馬主、委_二折衝果毅等_一、於_二当府衛士及弩手内_一、簡_二家富堪_レ養者_一充、免_二其番上鎮防及雜役_一。若從_二征軍還_一、不_レ得_レ留_レ防」。速水大「天聖厩牧令より見た折衝府の馬の管理」『法史学研究会会報』一五、二一〇一年。

- (17) 横山貞裕前掲註(13) 論文。

- (18) 『天聖令校証』賦役令復原唐令十五条。

- (19) 市大樹「日本古代伝馬制度の法的特点と運用実態―日唐比較を手がかりに―」『日本史研究』五四四、二〇〇七年、中大輔「北宋天聖令からみる唐の駅伝制」鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、二〇一一年。

- (20) 青山定雄前掲註(3) 論文では、伝馬も駅に配備されていたとするが、駅は伝送馬に乗る使者に供給をおこなうだけで、配備はされなかった。王冀青前掲註(5) 論文では、沙州の「伝馬坊」のような馬坊が唐全土にあったとするが、荒川氏が指摘するように史料上確認できない。荒川正晴「唐代公用交通システムの構造」『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』

名古屋大学出版会、二〇一〇年。

- (21) 永田英明「唐日伝馬制小考」鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、二〇一一年。

- (22) 『唐六典』卷三十 三府督護州県官吏。

- (23) 大津透「唐日律令地方財政管見―館駅・駅伝制をてがかりに―」笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』上巻、吉川弘文館、一九九三年、のち「日唐律令制の財政構造」岩波書店、二〇〇六年に収録。

- (24) 中大輔前掲註(19) 論文。

- (25) 曾我部静雄「宋代の駅伝郵鋪」桑原博士還暦記念祝賀会編『東洋史論叢』弘文堂書房、一九三一年、のち『宋代政経史の研究』吉川弘文館、一九七四年、青山定雄「宋代の郵鋪」『東方学報』六、一九三六年、のち「宋代における通鋪の発達」『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館、一九六三年、曹家齐「宋代交通管理制度研究」河南大学出版社、二〇〇二年。

- (26) 市大樹前掲註(19) 論文。

- (27) 宋家鉦「唐《厩牧令》駅伝条文的復原及与日本《令》、《式》的比較」『唐研究』一四、二〇〇八年。

- (28) 侯振兵「唐《厩牧令》復原研究的再検討」『唐史論叢』二〇、二〇一四年。

- (29) 宋氏が二条に分けた根拠である公使乗駅条の存在を考えると、一条にする必要があるか判断に迷うところ

ろである。駅使についての規定は駅使への支給規定
を収める公式令に存在したと考えられるが、現在の
ところ復原できないため、後考を俟ちたい。

(30)『新唐書』百官志一 礼部。

(31)『唐会要』卷六十一 御史台 中 館駅使。

(32)宋氏も同様の推論をしている。宋家鈺前掲註(26)
論文。

(33)同条は宋氏も侯氏も復原していない。

(34)『唐六典』卷五 尚書兵部 駕部郎中。

(35)『令義解』既牧令 水駅条。

(36)宋家鈺前掲註(9) 論文。

(37)宋家鈺前掲註(9) 論文。

(38)荒川正晴前掲註(7) 論文。

(39)ファム・レ・フイ「賦役令車牛人力条からみた遞送
制度」『日本歴史』七三六、二〇〇九年。

(40)荒川正晴前掲註(7) 論文。

(41)黄正建(翻訳 山口正晃)「天聖令における律令格式
勅」大津透編『日唐律令比較研究の新段階』山川出
版社、二〇〇八年、中大輔前掲註(19) 論文。

(42)または官馬が用いられる可能性もある。『天聖令校証』
既牧令復原四十五条では伝送馬・驢と官馬とが併記
されており、官馬も出使することが想定されている。

(43)荒川正晴前掲註(20) 論文。

(44)宋家鈺前掲註(9)・(27) 論文、侯振兵前掲註(28)
論文。

(45)中大輔前掲註(19) 論文、永田英明前掲註(1) 論文。

(46)本稿でも検討したようにNo.52は唐令に復原できるか
不明であるが、一応駅制に関する条文である。No.53
は伝送制に関する条文であるが、当初の唐令には含
まれておらず、追加された条文である可能性が高い。
伝送馬の利用については別に論じたい。

表 1 唐・宋・日本厩牧令条文対照表

No.	宋氏御原	天聖令	天聖令条文名	宋氏分類	唐令拾遺	拾遺補	舊唐令	舊唐令条文名	内容
1	復1	宋1	繫間象馬給兵牧子条	A	1	補訂	1	厩細馬条	官畜飼育の人員規定
2	復2	宋2	繫間象馬給牧靈条	A	2				官畜への靈支給量
3	復3	宋3	繫間給豆馬粟条	A	3	補訂			官畜への豆・塩・糞支給量
4						※	2	馬戸分番条	(馬戸の番役と飼草飼糧の規定)
5	復4	宋4	繫間官畜請草豆条	A					草・豆の支給・管理規定
6	復5	宋5	官畜諸脂粟条	A		※	3	官畜条	粟種の支給規定
7	復6	唐1	馬牛成群条	B	4	補訂	5	牧母牧条	牧の構成と牧子の人員
8	復7	唐2	諸牧置長条	B		※		牧馬帳条	牧の職員と任用規定
9	復8	唐3	給牧匠条	B					獣医と牧戸の任用規定
10	復9	唐4	雜畜飼吃青時日条	B		* 訂補			乾草と青草の切り替え時期について
11	復10	唐5	駒背二歲別群条	B	5甲	補訂			駒・種駒を分ける年令について
12	復11	唐6	遊北置課条	B	5乙	補訂	6A	牧北馬条A	牧の馬・牛・羊の遊北と置課の年令
13	復12	宋6	北土回群遊北条	B					牧の飼育形態について
14	復13	唐7	年課駒置条	B			6B	牧北馬条B	牧での置課数規定
15	復14	唐8	每駒駒置条	B	6	補訂	7	每乗駒条	置課数を越えた場合の置課規定
16	復15	唐9	雜畜耗条	B	7	補訂	8	死耗条	年間の減少許容数について
17	復16	唐10	失牧逐条	B	8		9	失馬牛条	官畜を亡失及び不当に死損させた際の課散
18	復17	唐11	馬牛印字条	C	9	補訂	10	駒指条	牧での焼印の種類と箇所
19	復18	唐12	諸府官馬印字条	C					諸府官馬の焼印と箇所
20	復19	唐13	獸監調成馬牛印字条	C					獸・伝送・鎮戍などの馬牛の焼印と箇所
21	復20	唐14	印在畜府条	C					焼印の管理規定
22	復21	唐15	在牧駒指対印条	C					焼印の時期と登録帳簿作成について
23	復22	宋7	牧主休養勿印条	C					祭祀に供する羊には焼印しない規定
24	復23	[補]	尚集每配置駒馬条		16	補訂			尚集局・東宮の調置馬規定
25	復24	[補]	諸牧監使毎年諸細馬進条						遼右牧・祥麟・鳳苑馬の進上する馬について
26	復25	唐16	官戸放逐牧子放免条	D					10年間、牧で働いた官戸放を良とする規定
27	復26	唐17	牧制人入牧地条	D					牧地での採折の許可規定
28	復27	唐18	諸牧置監条	D					牧の名称や規模について
29	復28	唐19	須臾師条	D					畜獸の監視について
30	復29	宋8	牧地牧草条	D		※	11	牧地条	牧地の火入規定
31						※	12	須臾印条	焼印の際の人員の調遣方法
32	復30	唐20	衛士家畜官馬条	D		※	13	牧馬匠場条	諸府の官馬を馬主に付て飼養する際の規定
33	復31	唐32	置置駅条	E	10	補訂	14	須臾駅条	駅の設置場所

34	復32	唐33	置駅私馬条	E	11		15A	駅各置馬条A	駅馬の任用・駅馬の設置数
35					12		15B	駅各置馬条B	(駅馬の死に際して駅馬が陥穽すること)
36					13		16A	置駅馬条A	(駅馬の設置数)
37	復33	唐34	駅馬給丁条	E				駅丁の設置	
38	復34	唐21	駅馬伝送馬驢取官馬馬主養馬条	E			16B	置駅馬条B	官馬を駅馬・伝送馬に充てることと伝送馬の飼養規定
39	復35	宋11	水路給船条 (水駅)	E	14		17	水駅条	水路での給船 (水駅の設置)
40	復36	宋15	諸駅受糧部条 (駅受糧部条)	E					駅に糧を支給する際の規定
41	復37	宋12	車道不得通過条 (駅不得通過条)	E		※	18	車駅条	車馬の乗り越し禁止規定 (駅馬の乗り越し禁止規定)
42	復38	唐22	官馬伝送馬驢死開膳給条	E	17		19	車回官馬条	官馬・伝送馬驢の飼養・補充規定
43	復39	唐35	伝送馬養給条	E					伝送馬の利用範囲
44	復40	唐23	官馬伝送馬驢を病負亮条	E	18	補訂	20	駅伝馬条	乗用に堪えない官馬・伝送馬驢の換簡規定
45	復41	宋9 (前半)	出使館馬等第条 (給伝送馬条)	E	15		公式42	給駅伝馬条	通馬の支給数 (伝送馬の支給数) (駅馬の支給数は公式令)
46	復42	宋9 (後半)	出使館馬私馬充条	E		※	21	公使乗取条	通馬の不足時の対応 (伝送馬の不足時には私馬を充てる)
47	復43	唐24	諸府官馬校役条	E					官馬の校役規定
48	復44	唐25	官馬伝送馬使軍行条	E					官馬・伝送馬の使軍規定
49	復45	唐26	官人集伝馬供給条	E		※	22	集伝馬条	伝送馬驢・官馬利用者への供給について
50	復46	唐27	州縣伝馬承直給地条	E					伝送馬の分番と給地規定
51	復47	宋10	官私間馬配等条	F	19		23	国御条	閤番の取扱と売却について
52	復48	唐28	關馬繕養条	F	20		24	關邊物条	關番の管轄と処置について
53	復49	唐29	官畜私馬配条	F		※	25	官私馬牛条	官私の馬牝の進上規定
54	復50	唐30	私馬用關造印条	F					私馬印の規定
55	復51	唐31	官馬驛配牛死収防配条	F		※	26	官馬牛条	死損した官畜の利用規定
56	復52	宋13	因公使東官私馬致死条	F	21		27	因公事条	公用で官私の馬牛を死損した際の規定
57					22	削除			
58	復53	宋14	官畜在道羈病条	F	23		28	官畜条	官畜が道中で瘦弊した際の規定

※条文名は宋・蔡絛氏の復原研究 (宋・蔡絛前掲註 (9)・(27) 論文) を参照したが、一部変更した。

※宋令条文名の () 内は唐令復原の際の条文名。

※細部部分は宋・蔡絛氏により排列が変更された交通関係の部分である (宋・蔡絛前掲註 (27) 論文)。

※宋氏分類の項目の内訳は次の通りである。「諸番給丁飼養類」=A、「諸番管理責課類」=B、「諸番印字類」=C、「諸牧置監与牧地管理类」=D、

「厨匠類」=E、「閤番・驛番・死病処理与官私畜帳類」=F。

※『唐令拾遺補』項の「*訂補」は、池田温『唐令と日本令 (二)』『唐令拾遺補』の訂補 (『創価大学人文論集』11、1999年) を参照。

表 2 復原唐厩牧令排列案

No.	分類	天皇令	復原唐令本文	宋臣分類	唐令拾遺	拾遺補	舊唐令	舊唐令本文	唐令の内容
1	官畜への支給規定	宋1	梁餉家馬給牧子条	A	1	補訂	1	殿細馬条	官畜飼育の人員規定
2		宋2	梁餉家馬給牧子条	A	2	補訂			官畜への遺支給量
3		宋3	梁餉給豆塩梁条	A	3				官畜への豆・塩・梁支給量
4		宋4	梁餉官畜請草豆条	A					豆・塩の支給・管理規定
5		宋5	官畜諸厩梁条	A		※	3	官畜条	梁類の支給規定
6		唐1	馬牛成群条	B	4	補訂	5	牧母牧条	牧の構成と牧子の人員
7		唐2	諸牧置長条	B		※	4	牧馬条	牧の職員と任用規定
8		唐3	給置医条	B					獣医と牧戸の任用規定
9		唐4	雜畜飼牧青時日条	B		* 訂補			乾草と青草の切り替え時期について
10		唐5	騎猪三歲別群条	B	5甲	補訂			騎・猪の群をかける年令について
11	官畜の生産規定	唐6	逆北貢馬条	B	5乙	補訂	6	牧北馬条	牧の馬・牛・羊の逆北と貢馬の年令
12		宋6	北杜向群逆北条	B					牧の飼育形態について
13		唐7	年課騎猪条	B			6B	牧北馬条 II	牧での貢課数規定
14		唐8	雜畜死耗条	B	6	補訂	7	每乘駒条	貢課数を超えた場合の乗置規定
15		唐9	雜畜死耗条	B	7	補訂	8	死耗条	年間の減少許官数について
16		唐10	失補逐条	B	8		9	失馬亡条	官畜を亡失及び不当に死損させた際の課徴
17		唐11	馬牛印字条	C	9	補訂	10	駒猪条	牧での焼印の種類と箇所
18		唐12	諸府官馬印字条	C					諸府官馬の焼印と箇所
19		唐13	京監諸戎馬牛印字条	C					駅・伝送・鎮戌などの馬牛の焼印と箇所
20	焼印の規定	唐14	印在省府条	C					南印の管理規定
21		唐15	在牧駒猪印印条	C					焼印の時期と登録簿作成について
22		宋7	牧牛供養勿印条	C					祭祀に供する年には焼印しない規定
23		[補]	尚乘每配習取調馬条		16	補訂			尚乘局・東宮の調習馬規定
24		唐16	諸牧使毎年防細馬進条						隴右牧・社隴・鳳苑厩の進上する馬について
25		唐17	官戸奴充牧子放免条	D					10年間、牧で働いた官戸奴を良とする規定
26		唐18	牧御人入牧地条	D					牧地での採所の許可規定
27		唐19	諸牧置梁条	D					牧の名称や規模について
28		唐19	桑猪飼条	D					畜計の更新について
29		宋8	牧地唐阜条	D		※	11	牧地条	牧地の出入規定

30		唐20	衛士家養馬馬条	D		※	13	牧馬の規程	諸府の官馬を馬主に付して飼養する際の規定
31	官馬・伝送馬の管理	唐21	駅馬伝送馬餉取馬条	E			16b	遺駅馬条B	官馬を駅馬・伝送馬に充てることと伝送馬の飼養規定
32		唐22	官馬伝送馬餉死馬餉替条	E	17		19	軍回馬条	官馬・伝送馬の飼養・補充規定
33		唐23	官馬伝送馬餉老馬餉売条	E	18	補訂	20	駅伝馬条	乗用に堪えない官馬・伝送馬の換飼規定
34		宋9 (前半)	給伝送馬条	E	15		公式42	給駅伝馬条	伝送馬の支給数(公式令)
35		宋9 (後半)	出使無馬私馬充条	E		※	21	公使軍駅条	伝送馬の不足時には私馬を充てる規定
36		唐24	諸府官馬校牧条	E					官馬の校牧規定
37		唐25	官馬伝送馬使置行条	E					官馬・伝送馬の使置規定
38		唐26	官人東伝馬供給条	E		※	22	東伝馬条	伝送馬・官馬利用者への供給について
39		唐27	外填伝馬承置給地条	E					伝送馬の分贈と給地規定
40		宋10	官私調馬配旁条	F	19		23	国御条	調畜の取扱と売却について
41	官・私諸畜の管理	唐28	調馬雜畜条	F	20		24	調遣物条	調畜の管轄と処置について
42		唐29	官畜私馬雜条	F		※	25	官私馬牛条	官私の馬牛の進上規定
43		唐30	私馬甲牒造印条	F					私馬印の規定
44		唐31	官馬調配生死収防配条	F		※	26	官馬牛条	死損した官畜の利用規定
45		宋13	因公使集官私馬致死条	F	21		27	因公事条	公用で官私の馬牛を死損した際の規定
46		宋14	官畜在道病斃条	F	23		28	官畜条	官畜が道中で発祥した際の規定
47		唐32	遺駅条	E	10	補訂	14	須置駅条	駅の設置場所
48		唐33	直駅長駅馬条	E	11		15	駅名直長条	駅長の任用・駅馬の設置数
49		唐34	駅馬給丁条	E					駅丁の設置
50		宋11	水駅条	E	14		17	水駅条	水駅の設置
51	規定	宋12	諸駅不得渡過条	E		※	18	集駅条	駅馬の乗り越し禁止規定
52		宋15	諸駅受解置条	E					駅に置置を交結する際の規定
53		唐35	伝送馬差給条	E					伝送馬の利用範囲

※註記は表1と同じ。

